企業名：　宝ホールディングス

レポート名：　宝グループレポート 2021

1.　この会社が目指す姿が理解できるか

宝ホールディングスの企業理念は「自然との調和を大切に、発酵やバイオの技術を通じて人間の健康的な暮らしと生き生きした社会づくりに貢献する」というものである。当グループには国内事業の宝酒造、海外事業の宝酒造インターナショナルグループ、バイオ事業のタカラバイオグループの三つのセグメントがある。レポートにはそれぞれのセグメントにおける中期、長期の事業戦略が掲載されており目標が明文化されている。

また、企業理念をもとにさらなる社会貢献を果たすにあたって「安心・安全」、「健康」、「酒造メーカーとしての責任」などを含む 10 の取り組むべき社会問題に対する「宝グループ・サステナビリティ・ポリシー」が定められている。それぞれの問題に対して具体的施策とより細かい目標が明記されている。たとえば「健康」については主に取り組んでいるテーマとして(1)世界のライフサイエンス研究と発展への支援(2)遺伝子解析技術の検査や診断への応用(3)遺伝子治療実現への取り組み(4)健康配慮型商品の提供　が挙げられている。(4)の具体的施策については①糖質ゼロ、糖質オフ製品の開発②料理清酒の食塩ゼロ訴求③オーガニック食品等の提供④食物アレルギーに配慮した製品の開発　が挙げられている。以上のことからこの企業の目標とする姿を十分に理解することができる。

2.　この会社の競争優位性が理解できるか

宝酒造に関しては「和酒 No.1 企業」とだけ述べられており、あまり競争優位性を感じなかった。一方で宝酒造インターナショナルグループは日本食材卸のネットワークが充実しており、海外での日本酒人気も高まっていることから他の海外向けの日本食材卸会社よりも競争優位性があると思った。

また、タカラバイオグループは 1970 年代から研究用試薬を中心にバイオ事業に着手し、1988 年には PCR 製品の国内独占販売を開始していたため、PCR 製品に対するノウハウが蓄積されている。現在、唾液検体を対象とし、独自の高速 PCR 反応により約一時間で結果を知ることができるという PCR 検査キットを販売している。さらには分子疫学的研究などへの貢献やワクチン開発などに対する製造協力を行っている。以上のことからタカラバイオグループの競争優位性は十分に理解することができる。

3. その競争優位性に持続性があるかどうか理解できるか

まずタカラバイオグループの競争優位性について述べる。タカラバイオは革新的なバイオ技術を生かして遺伝子治療などの先端医療技術の開発を進めており、2008 年に日本で初めて体外遺伝子治療の治験を開始した後も、様々な臨床開発を着実に推進している。遺伝子治療の倫理的課題への取り組みについては何も述べられていないが、競争優位性に持続性があると理解できる。

次に宝酒造と宝酒造インターナショナルグループについてだが、どちらも持続性があるかどうかについて理解できなかった。その理由として、コロナウイルスによる客層の変化が挙げられる。国内では業務用需要が低下した一方、家庭内需要が増加した。また国外ではレストランなどからの需要が減少し、小売店向けの販売を始めた。このような変化がこれからの経営にどう影響するのかまだわからない。

4. この会社で自身の人的資本の価値向上を達成できると思うか

わたしは達成できると思った。宝グループは「人」をかけがえのない「財産」であるという視点の元、人材を「人財」とよんでいる。その人財育成のためにグループ会社員を対象とした「歴史記念館見学研修プログラム」を実施している。これはいつの時代においても、変化や失敗を恐れることなく、新しいことに挑戦するとともに、仮に失敗したとしてもそこから学び、さらに挑戦し続けるという企業風土を醸成するためでもある。その例として挙げられるのが遺伝子治療などのアンメット・メディカル・ニーズ（いまだ充足されていない医療ニーズ）への取り組みだと思う。新しいことに挑戦するときに失敗はつきものだがその経験は自分自身を成長に導くだろうと思った。

5. 報告書にはどのような改善余地があるか

宝酒造の競争優位性をもっとアピールするべきだと思った。また中期、長期の経営戦略で「国内の和酒 No,1 メーカーのポジションを活用した付加価値の創造」と述べられているが、具体的な策も一緒に述べることで宝酒造の目標がより伝わると思う。また、